



## 『仕事の辞め方』

鈴木おさむ 著

幻冬舎 刊

定価 1,650円 (本体1,500円+税)

“ソフト老害”という言葉が社会に広めた本で、読むと老害と転職という2つの事柄について考えさせられる。

企業に居座って周囲に迷惑を掛ける頑固な老害に近づきつつあるのがソフト老害で、放送作家の著者は40代の自分がソフト老害だったと振り返る。テレビ番組の制作現場で上司の気まぐれに追従するために若者を翻弄する老害たちに反感を持った若き日の著者。しかし、40代になって周囲への発言力が強まったところ、組織全体のバランスを考えて若者のアイデアを安易に却下する自分もまたソフト老害になっていたと気づくのだ。

社会の超高齢化とハラスメント被害が瞬時に投稿・拡散されるSNSの普及で世代間の断絶は深まっている。目指すべきは世代間の意見の一致ではなく、自身の客観視と相手の立場への理解だと本書は教えてくれる。

現在51歳の著者は放送作家業から

退くことを決意した。仕事とはライフステージや経済・社会的状況に伴い流動的に変化するものだが、著者が仕事を辞めるきっかけは外的要因ではない。ワクワクしない仕事を続けるほど人生は長くないと思ったからだ。大切なものを見極め、惰性の仕事を手放せば、新しく得るものが必ずあると著者は説く。

労働に意味と喜びを求めて転職するのは自然だろう。仕事は収入のためだけでなく実存的欲求を叶えるものだから。しかし、転職が当たり前の欧米とは違い、社会保障の仕組みが整わない日本では転職の失敗はリスクだ。本書は、著者のように誰もが己に誠実に向き合っただけでなく実存的欲求を叶えるものだから。しかし、転職が当たり前の欧米とは違い、社会保障の仕組みが整わない日本では転職の失敗はリスクだ。本書は、著者のように誰もが己に誠実に向き合っただけでなく実存的欲求を叶えるものだから。

それにしても素直な言葉がまっすぐ心に届く本だ。情報収集や人脈作りよりも健全な思考が転職に最も必要なのかもしれない。著者の考えに触れてそんなこともふと思った。

(日本農業新聞 齋藤 花)